

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から②

伊予灘を望む滝山城（大ど手が込んでいます。兜は銀洲市長浜町）の戦国時代 箔を施し、僧侶がかぶる頭末期の城主・久保行春が所 巾（ずきん）の一種である用したと伝わる鎧（よろい） 帽子（もつす）をかたどった（い）兜（かぶと）がある。

紋柄威五枚胴具足（もんがら おおごし）まいごつぐそく）と、銀箔押帽子形（ぎんぱくおしもつすなり）兜（かぶと）だ。

鎧は、鮮やかな浅葱色（あさぎいろ）を基調にしながら、前に紅、後に白で、おめでたい模様とされる州浜（すはま）紋をあしらっている。五枚の胸をつないでいるが一見、二枚胸に見えるように威糸を編み込むな

特徴が一致することから、この鎧と兜が先祖ゆかりものとして代々受け継がれていたことが分かる。江戸時代の大名家に伝わる鎧や兜は数多く残っているが、中世から近世に移り変わる時代の地方の小領主のものとしては、貴重な残存例と言える。

ちなみに、久保氏ゆかりの武具には、この他にも麻製の流旗（ながればた）、1519（永正16）年の「長船祐定」銘のある刀なども伝来している。旗は上段に神仏名、中段に上り藤の紋が入るものだが、こちらも「大洲旧記」の中に「白地に上り藤の紋」の旗が伝わっていたことが紹介されている。

発見された当初は汚損や破損が著しい状態だった

庄屋になった子孫継承

が、専門家の協力を得ながら修理などを進め、往時の姿がよみがえることとなった。大名具足のような豪華さはないものの、庄屋になった後も、乱世を生きた先祖への敬意や家の誇りを大切に守り続けた結果として、現代まで伝えられた珍しい鎧と兜である。

（専門学芸員・山内治朋）

〈月2回掲載します〉

戦国期小領主の鎧兜



大洲の小領主のものと伝わる紋柄威五枚胴具足と銀箔押帽子形兜 土山桃山時代―江戸時代初期、個人蔵・県歴史文化博物館保管